

ホメオパシーの神秘を解いてみたら

ホメオパシー療法簡潔ガイド ジェイコブ・ミルマン医学博士

(訳：ザグリベリナヤ・エレナ、平田千津)

「冗談をたずさえて自分の心を開いてみて、しばらく自分の心が笑うのを見守りましょう。それから始めて真面目になりましょう。」

タルムードより

ホメオパシーとはいったいどのようなもののでしょうか？その問いに対する答えには次のようなものが見られます (あります)。(つまり、)

- ・ 「ホメオパシーとはビタミンとミネラルの栄養補助食品を使った例の熱狂者の療法」；
 - ・ 「有機栽培ハーブを使うもの」；
 - ・ 「聞いたことがない」；
 - ・ 「なんか変な機械を使ったりする治療」；
 - ・ 「暗示と偽薬を使った療法」
- などです。

これらの答えは創造的ではありますが、どれひとつ正しくありません。実はホメオパシーは、現代の医学では一番堅く守られている秘密です。通常の医学は確固とした地位を獲得しているのですが、現代医学が持つ人間の苦しみを癒すその力は、ホメオパシーの持っているそれとは比べ物にならないくらい小さいものです。それなら、なぜもっと多くの医師がホメオパシーを利用しないのでしょうか？答えは簡単です。第一に、いわゆる「合理的な」考えをもった人達には、一見、ホメオパシーは意味をなすものには見えないからです。第2に、通常の医学と比べて、ホメオパシー療法の診療はかなり難しい仕事であり、ほとんどの医師はホメオパシーにほんのちょっと手を出してみるだけで終わるので、あまり良い結果を得ることができないからです。最後に、ホメオパシーによる治療をまじめにやろうとすると、1人の患者の診察に十分に時間を取らなければならないので、1日に40人ではなく、たった8人の患者しか診察することができなくなります。それでは営業を続けることが金銭的にかなり難しくなるでしょう。

ホメオパシーの診療所を開業して以来、私の新しい患者、あるいは患者になるかもしれないような人達向けの、簡潔なホメオパシーの説明書を探しましたが、なかなか見つけることができなかったので、自分でそのような本を書く必要を感じて、この1冊を書きあげました。この本はホメオパシーに興味を感じた一般の人たちにも、医師あるいは学者にもお勧めしたいものです。経験から言えば、自分はホメオパシーのことを分かっているとおっしゃる方たちのほとんどは間違っているので、私がまとめたこの1冊の本がそういった方々にとって何らかの説明となり、役に立つことを願っています。

「子供の頃、あなたは、魔術師とは何でもできる人だと思っていたことだろう。私もそう思っていた時期があった。私たちはみんな、そう思っていた。しかし実際は、ある人の実力が増していき、知識が増えていくに連れて、その人がたどりうる道は狭くなっていく。ついに最後になると、そのひとは何の選択肢も残されていない状態に至って、ただひたすら自分のやるべきことだけをやるようになる…」

ウルスーラ・ケイ・ルグイン

私の転向—ありえないことを容認すれば

ミネソタ大学で医学の勉強をはじめた頃、私は、現在一般に広く普及している医学、つまり「アロパシー医学」以外には考慮すべき療法は存在しないと信じていた。しかし、現代医学に代わる療法としてどんなものが存在するのかということを知っておくために、ヒューマニスティック・ヘルス委員会 (Humanistic Health Committee) が主催した、医学を学ぶ学生にいわゆる「代替療法」を紹介するための講義に出席することもあった。委員会に招待された人たちの中には鍼灸師、応用運動科学療法士、カイロプラクティック療法士、ロルフマッサージ師、トラウマ療法士、精神療法士などがいた。講演の中には説得力のあるものとそうでないものがあった。ホメオパシー療法士の講演を聞いたとき、その講義は全く意味のないことに聞こえ、私は激怒した！そんなばかげたことをやっている人は絶対に、完全なまぬけか、あるいは詐欺師であるに違いないと思ったが、ただ講演を行った人物はどちらにも見えないような人物ではあった。その療法の考え方全体はあまりにも信じがたいものに思えたため、私は逆に好奇心が沸いてきた。論駁できればと思い、その治療法をもっと深く研究してみることを決断した。

私はホメオパシーの緊急手当用の手引き書と、いくつかのレメディーを揃えて、それらを試すような機会が訪れるのを待つことにした。それほど長く待つ必要もなく、私の祖母が、軽いながら頻繁に起きる不安の発作に悩まされた。アメリカ合衆国に移住して以来、祖母は昔ロシアで使っていたバレリアン (カノコソウ) のチンキ剤を手に入れることができないでいた。そこで、いつものように祖母がこの不安の発作に襲われたとき、私は祖母に「これがカノコソウだ」といってホメオパシーキットの中からアコナイト (ACONITE) 6Xを渡した。祖母は渡されたものを喜んで受け取り、それを飲んですぐに落ち着きはじめた。もちろん、そのとき私はその結果をプラシーボ (偽薬) 効果 (暗示の力) だと確信した。彼女はそれがカノコソウだと信じたために落ち着いてきたのだと。従って、そうであることを裏付けるために、次に不安の発作が起こったときには、プラシーボを与えることにした。そのプラシーボは、見かけと味は全く変わらないものだったが、私が期待した結果をもたらすことはなかった。そこで今度はアコナイトを渡したところ、祖母はすぐに落ち着いた。それ以来、彼女は何本分ものアコナイトを使い切り、今だに使い続けているが、相変わらず大変よく効くのである。

子供のときから私は魔法が使えるようになりたかった。私が読んでいたおとぎ話、そしてそれに続いて読んだSF (科学小説) の主人公が持っていたような特別な能力を持つことはどういうものなのか、いつも想像しようとしていた。祖母にホメオパシーのレメディーを与えることは、私をなんとなくそんな魔法使いになったような気分させた。全く効くはずのないものを与えたつもりだったが、それにもかかわらずその効果は著しく、かつ何回も再現できるようなものだった。そのときはまだ気づいていなかったが、私はすでにホメオパシーにのめりこみ始めていた。

私にとって、決定的でかつ戻ることのないホメオパシーへの転向は、1985年に起きた。その年、父が自

己免疫性疾患に見舞われた。父は、激しい筋肉痛、発汗、高熱といった症状を訴え、体重が減少し、血沈速度は130と、体内のどこかで大変激しい炎症が起きていることを示す症状だった。発病から1ヶ月後、父はミネアポリスのマウントサイナイ・メディカルセンターに入院した。父は総合的な検査を受けたが、10日経っても診断が確定されなかった。彼の体調はさらに悪化し、そのときにはすでに寝たきりになってしまっていた。父には、治療のためステロイド剤が勧められたが、ステロイドを使う代わりに、父はホメオパシー治療を行う医師を受診したところ、突然、大変目覚ましい回復を見せた。診察の翌日には、父はほとんど何の痛みも感じなくなっていた。1ヶ月以内でそれ以外の症状も徐々に消え、血沈速度は10まで下がった。

この一件を見て、私はホメオパシー療法をもっと詳しく研究することを決断するにいたったのだ。私は文献を調べ、何人かのホメオパスの診察に参加した。そして私はこれを自分で習得すると決意するほど、ホメオパシーに感動した。病院での研修期間を終えた後、私は世界中を回ってまで、ホメオパシーをできる限り包括的に学んだ。米国に戻り、私はパートで内科専門医をやりながら、ホメオパシー療法を使い始めた。そうしているうちに、現代医学は、ある特定の場合には役に立つけれども、やはりホメオパシーの有効性に匹敵するものではないことに気がついた。現在、アロパシー薬は、一時的に症状を軽減する（つまり、ホメオパシーが効き目を発揮するまでの間、症状を軽減させる）ため、あるいは、まれにあるホメオパシーを使えない場合に限って使用している。

「学者は全く子供のようにでなければならない。彼が何かを見たとき、それを見るだろうと思ったやいなや（にもかかわらず）、それを見たと言わなければならない。見るのが先で、考えるのはその次、そして見たものを確認するという順にならなければならない。必ず、見ることを先にしなければならない。そうでないと、絶対に見たいと思ったものだけを見ることになってしまう。学者の大部分はそれを忘れてしまっているのだろう。」

ダグラス・アダムス

「さよなら、そしてすべての魚はありがとう」

ホメオパシーの歴史－疑問は真実を生み出す

ホメオパシーの創始者であるサミュエル・ハーネマン博士（1755－1843）について触れなければ、ホメオパシーの議論は不完全なものにしかならない。ハーネマンは1779年に医学校を卒業して開業したが、早くに、当時支配的だった医療の考え方とやり方に幻滅を覚えた。その当時の医師は誰もが皆そう教わったように、ハーネマンも、病気は患者の体内に過剰にたまっている体液あるいは「溶液」によるもので、治療はその過剰な体液を排出させることだと習った。一番手近な「溶液」は血液だったので、大量の瀉血が行われた。そのための技術は多様だったが、目的は同じで、できるだけたくさんの血液を流し出すことにあった^[1]。

医師は、静脈からもう何も出なくなるまで瀉血を続けることを主張していた。子供の患者は、血液の5分の4が流れ出るまで瀉血を続ける必要があるとされていた。それ以外の「溶液」は大量の通じ薬や催吐剤の使用を含む、様々な浄化方法によって排出された。砒素や水銀など、さまざまな毒性の物質も病気の治療に使われた。例えば、水銀は梅毒に効果的だとされており、患者が多量の唾液を分泌しはじめるまで水銀を摂るように言われた（現在では、こういった症状は深刻な水銀中毒の証拠だと分かっているが）。今の私たちの視点から見れば、このような極めて乱暴な治療法に対しては、同情心のある医師なら誰でも反発するだろうと思われるが、その当時ハーネマンの同僚に医師達はそれに代わる治療法を持っておらず、習ったとおりの治療を続けていた。彼らは自分の仕事に全力を尽くして、当時としては一番進んだ技術を利用していたのである。

さて、現在の状況はこれとどれだけ違っているのだろうか？現代の医師の多くは、子供のどんなに軽い風邪にも抗生物質を処方するが、これは、やがて免疫を破壊するやり方である。昔の医師と同じように、現代の医師達は、この治療法が一番いいと思っている。彼らは正直で、働き者で、教わったとおりの治療法を実践している。読者の皆さんはおそらく、抗生物質は本当にすばやく効果的に効くと指摘して、現代のやり方を弁解するだろう。瀉血も、短期的に見るとしばしば効果はあったのだ。しかし、やはり長期的に見れば、不適当な抗生物質の使用と同じように瀉血と中毒療法が頻繁に行われたことによって、患者に慢性疾患がもたらされていたといえるだろう。

ハーネマンは、鋭く、研究精神に富んだ知力の持ち主で、誰のことも、また何も表面どおりに信じることに抵抗を持っていた。ハーネマンの著書が示すように、彼は、同僚達のように、自分の教師に対して全く疑問を持たず、信頼によって理性を奪われてしまったような人ではなかった。彼は当時支配的だったや

り方に対して反抗したり、それに従っていた者に対する批判を表明していた。彼の著作は同時代の医学に対する軽蔑にあまりにもあふれていたため、彼は早くも悪魔の具象とされるようになった。結局、ハーネマンは自分の患者達に、流行しているやり方とは違う治療法を提供できなかったで、単に医学から完全に離れることにした。彼は化学者として働きながら、増えていく家族のために追加の収入を得るため、翻訳をしていた。その2次的な職業を通じて、彼は結局、ホメオパシーにめぐりあったのである。

あるとき、ハーネマンはキナの木の新皮を使ったマラリアの治療を取り上げた、当時有名な医師が書いた本を翻訳していた。著者はその物質の効果はその苦味から生じると示唆していた。疑い深い精神を持つハーネマンは、この説明に納得できなかった。ハーネマンは、苦味がはるかに強いもので、マラリアの治療には全く役に立たない物質を、いくつも簡単に列挙することができるという内容の批判的なコメントを自分の翻訳に付け加えた。

さらに、おそらく単なる批判だけでは満足できなかったのだろうが、ハーネマンは自分でキナの木を大量に服用してみた。すると、高熱、発汗、体の痛みなど、つまりマラリアの症状を起こしたのである。回復するまでその症状はしばらく続いた。

そこでハーネマンは次のような仮説を立てた。つまり、キナの木がマラリアを治す効果がある理由は、健康な人にマラリアのような症状を起こすことができるからであると。そして彼はそれ以外の物質を実験として自分で摂取したり、自分の「不幸な」家族と彼らの家を訪問する勇気をもった人々に与えたりして、発生する症状を全て、細かく記録した。その当時、医師の不良な処置に対して裁判を起こすことが可能だったとすれば、ハーネマンはホメオパシーを開発できなかったかもしれない。

ハーネマンは再び患者の診療を始め、患者が訴える症状に対して、健康な人にそれと同じ症状を引き起こす物質を処方した。すると、患者はハーネマンの仮説を裏付けるほどの回復を見せた。

Similia similibus curentur (シミアリア・シミアリバス・クーレンタル) というラテン語は、ホメオパシーの唯一の原理を表現している。すなわち「似たものが似たものを治す」である。これはホメオパシーの全てを説明する表現である。ホメオパシー療法の専門家の目的は、患者を苦しめている症状と同じ症状を健康な人に引き起こす物質を探し出すことであり、その物質を患者に与えて「奇跡」が起こるのを観察する。その奇跡は本当に素晴らしいものである。

ホメオパシーは、アメリカ合衆国には19世紀半ば頃にハーネマンの弟子たちによって持ち込まれた。そして直ちに治療法として大成功を収め、19世紀の終わり頃には、アメリカ合衆国では何千人ものホメオパスが活動していた。この「ニュー・スクール」派の人気は20世紀初頭まで続いた。ちょうど近代製薬会社が、効果的で簡単に処方できる新薬を出し始めた頃までである。新薬が出ると、患者から包括的なケースを聞き出してホメオパシーのレメディーを見つけ出すよりも、例えばアスピリンを処方することの方が簡単になったのである。多くの医師は簡単な道を選び、ホメオパシー医学は舞台から消え始め、次第にほとんど存在しない状態にまで落ち込んだ。

しかし、その間ホメオパシーはほんの少数の忠実な治療家によって守られ、1970年代にその有効性は再び認められるようになった。現在、ホメオパシーは強力な盛り返しを経験している。アメリカでは優秀なホメオパスを育成する複数の学校があり、世界中で数々のホメオパシークリニックが現れ始めている。今こそホメオパスの1人として活躍するのに最高の時期であることを強調したい！

「泌尿器医学の専門家から飲み物をもらってはいけない。」

エルマ・ボムベックの父親

プルービング

－病人の治療のために健康な人を「病氣」にする

様々な物質に特有な症状の全体像を解明するためにその物質を健康な人に試して見るというハーネマンのやり方は「プルービング」という名前で知られている。ハーネマン自身は自分の活動時期を通しておよそ100種類の物質をプルービングした。彼の研究を受け継いだ人達はその仕事を続けた結果、現在では2000ほどの物質がプルービングされている。ホメオパスは常に、次はどんな物質をプルービングすればよいかのを分かっていたわけではないので、レメディーの全体像を収めているホメオパシーの「マテリア・メディカ」と呼ばれる本の中に、一見治療薬には向いていない物質がたくさん含まれるようになった。現在では、もっとも治療に向いていないようないくつかの物質が私達ホメオパスにとっては一番貴重なレメディーとなっている。ホメオパシーのレメディーは、植物、動物、そして鉱物を基に作られる。レメディーの基になった物質のなかには、強い毒物やまたは何の反応も起こさない物質もある。（次章で詳しく説明する）適切な処理を受けてそれらの物質は毒性を失い、病を治す力をつけていく。

このような役に立つようには見えない物質が、強力なホメオパシーのレメディーに変身した極端な例としてPyrogenium（パイロジェニウム）があげられる。このレメディーは、腐敗するまで日光の下に放置された生肉から作られる。この肉を健康な人が食べたとすれば、その人は下痢、嘔吐、悪臭性の汗を伴う高熱、不安な落ち着きのなさ、体中の痛みなど、大変重い症状を訴えるだろう。つまり、その人がいわば腐った気分になるであろう。

腐敗した肉を食べたわけではなくても、何らかの理由でこのような症状をみせる患者がこのPyrogeniumで助かるのである。もちろんのことだが、ホメオパシーの治療家は誰にも腐敗した肉を食べることを薦めたりはしない。Pyrogeniumは次章で説明するホメオパシーで標準的に使われる方法によって加工されている。

上に述べたような症状を訴える腸チフスや他の腸疾患を持つ患者を見かけることは普段あまりないが、数年前、健康維持機関（HMO）で働いていたときに、なかなか治らない「風邪」にかかった50歳ぐらいの男性患者を診療することになった。その患者は、下がらない高熱、悪臭を伴う汗、不安な落ち着きのなさ、ひどい口臭などPyrogeniumを示唆する症状を訴えていた。その状態はすでに3週間ぐらい続いていて、なかなか回復に向かうことがなかった。そこで私は強い抗生物質を与えることにしたが、しかし私の予想通り、それでもこれらの症状は緩和されることがなかった。その患者はインフルエンザというウイルス性の病気にかかっている、それに対して抗生物質はもちろん効くことはない。実のところ、私は絶望のあまりこの抗生物質を試すことにしたのである。私はその患者を入院させようと思い、その準備として採血し、血液検査をした。私は彼に、検査の結果が出るまでに、ホメオパシーのレメディーを売っている店に行き、Pyrogenium30Cを買うように言った。レメディーが効くとは思っていなかったのだが、いずれにしても害が生じることはない。彼にはそのレメディーを2時間ごとに3粒採るよう処方し、2日後また診察に来るように言った。

その日から2日が経ち、血液検査の結果が届いた。それを一目見て私はぞっとした。ウイルスは赤血球

まで襲ったようだった。赤血球は腐敗し始めており、赤血球の中に通常含まれるヘモグロビンは血液の中に流れ込んで、腎臓を通じて尿に溶け出し、体内から流出しようとしていた。その途中、ヘモグロビンは腎臓の微細なフィルター組織を詰まらせ、検査結果では腎臓機能停止の早期段階の兆しがみられた。この患者は確実に集中治療室で厳格な監視を受ける方向へ向かっていた。彼は活発な静脈内注射による水分補給を必要としており、結果的に人工透析に至る可能性もあった。

私がこの最初の血液検査の結果を見た数時間後、その患者が診療室にあらわれた。私が一言も言わないうちに、彼は「先生、私は30パーセント回復しましたよ」と報告した。見かけも、少し良くなったように見え、私は何と言ったら良いかわからなくなった。彼は決して回復するはずがなかったし、それどころか、体調がさらに悪化して、すでに尿が出なくなっていていいはずだった。彼がルールを無視していたので、私も自分のルールを破り、もうしばらく様子を見ることにした。結局のところ、私は報告書の平均的データではなく、「生きている」患者を診察しているのだ。しかし、念のために私は新たに血液検査を行った。

また2日が過ぎ、最新の血液検査の結果は若干の容態の改善を示していた。患者は診療室に入って来ると、「先生、本当に効いているよ。もう70パーセントぐらい回復したよ」と告げた。患者の回復は着実に進み、血液の異常も取り除かれ続けた。2週間ほど過ぎた頃には患者は完全に回復していた。

ところがその1週間後、この患者は関節の急性痛風を訴えて救急診療に訪れた。このような経過は私にとってさらにうれしいことだった。彼は以前もこのような痛風の発作を起こしていたのだが、全般的に体調が改善する過程では昔の症状が一時的に再発するのは最も良い兆候であるからである（これはのちほど「支払い」という章で詳しく説明する現象である）。

私は痛みを和らげるため、彼に痛み止めを摂るよう勧めた。その痛風の発作はしばらくしたら自然に治った。数ヵ月後その患者に招待されて、彼がドライバーとして出場したカーデモリーションダービー（車ぶち壊しレース）で再会した。言うまでもなくその時には彼の体調は完全に回復していた。このケースは、うまくホメオパシーのレメディーが選ばれた場合の典型的な反応を示している。常にこのような教科書的なケースになるとは限らないが、かといって決して珍しいことではない。

「強い酒に気をつける。強い酒を飲んだら、収税士に発砲することをおもいつくかもしれない。それに的をはずすかもしれない。」？

ロバート・A・ハインライン
愛するためにたりの時間

レメディーの作り方ー

飲むウィスキーが少なければ少ないほど酔っ払う

ホメオパスは腐敗した肉のような物質を患者に与えて、なぜ何の処罰も受けないままでいられるのだろう。瀉血が一般的な治療法だった時代でも、ハーネマンは毒性の物質を加工されていない形で患者に与える場合、副作用が起こることを認めていた。水銀で梅毒を治療する場合、その物質が完全に患者のケースに対して適切だったとしても、患者に水銀中毒を引き起こすことになる。このような副作用を避けるためにハーネマンは服用量を減らすことを試みていたとき、服用量が減るにつれて副作用が少なくなるだけでなく、レメディーの効き目が高まることを発見した。

ハーネマンは何年も実験を重ね、現在使われているホメオパシーの調剤方法（「希釈」と「震とう」）にたどり着いた。ところが、現代科学ではこの調剤方法による効果を説明できないことが、主な障害となってホメオパシーが広く受け入れられていないのである。しかし、この見かけ上の矛盾にとらわれないことさえ決心すれば、画期的な効果を目にすることができる。

ホメオパシーのレメディーは、元になる物質を、途中で振動を与えながら何度も薄めて作られる。元の物質をある回数以上薄めたら、その物質自体はほぼ液体から消えてしまい、出来上がったレメディーの中から検出することはできない。たとえば、30Cという低めのポテンシー（希釈度数）のレメディーは元の物質を百倍に30回薄めたものであり、つまり、元の物質が10の60乗倍（1の後に60個のゼロが続く！）薄められたことになる。もちろんのこと、これは 6.0×10^{23} というアヴォガドロ数（1モルの純物質中に存在する分子の数）よりはるかに大きい数字なので、出来上がったレメディーの中に元の物質の分子を見つける可能性はどのようにみてもゼロである。このように作られた産物はサブモレキュラー（分子に及ばない）と呼ばれる。

30Cは低めのポテンシーであり、ホメオパシーでは通常、1M ($10^{2,000}$)、10M ($10^{20,000}$)、あるいは50M ($10^{100,000}$)といった希釈度の高いものがよく使われる。現代医学の観点から見ればまったく意味をなすものではないが、実際、希釈度が高ければ高いほどレメディーの効き目は、強くかつ長続きするものになる。

ここまでお読みになったら、私の患者が腐った肉から作ったレメディーを摂ってもさらに体調をくずすことがなかった理由がお分かりだろう。実はレメディーの中には腐敗した肉の成分はまったく残ってなかったのである。これは大変奇妙なことに聞こえるが、私は医学校でホメオパシーについて発表した人物が全くのまぬけか、あるいは詐欺師であるに違いないと思ってしまったのはそのためである。サブモレキュラー（分子に及ばない）薬が効果をあげることができるという考えは、私の理性に対する嫌がらせのように聞こえたものだ。今でさえそう聞こえるが、しかし実際に効果があるので、何とも言いようがない。このような場合、私は実際的な立場をとることにしている。ホメオパシーが害を与えることがないことを

知っていて、実際に試し、その効果を目の当たりにして見て、もう二度と後に戻ることができなくなったのだ。

この効果を「説明」しようとする試みもある。例えば、スタンフォード大学のティラー博士 (Dr. W.A.Tiller) は、理論物理学の観点からこの問題をとりあげた。私の単純な頭には博士の論文は難しすぎるが、読者の皆さんにはこの論文は見聞を広げるものとなるかもしれない。私が知っている限り、この論文は唯一の純粋に学問的な説明である。それ以外の説明は全て、より哲学的なものであり、それらを次章で紹介する。

「これは私にとって深すぎる。」

レオ・ロステン (本人が墓誌銘として使うために書いた文)

哲学—説明しえないことを説明する

ホメオパシーの中心をなす思想は、現代科学、少なくとも私たちになじみのある科学には由来していない。しかし、それらの思想を完璧に理解できなければホメオパシーを治療に役立てることはできない。この哲学に基づいて初めて、ホメオパスは患者のケースを正確に評価し、適切なレメディーを選び、ケース分析において混乱を避けることができる。この思想体系は200年の考察の結果であり、宗教的な哲学と懸命な現実観察に基づいている。

バイタル・フォース(Vital Force)—生命力〔自然治癒力〕—の概念からホメオパシーの哲学の紹介を始めたい。このバイタル・フォースの一端はキルリアン写真 (バイオエネルギー撮影) に現われるものであろう。バイタル・フォースは、私たちの体に命を吹き込む (アニメートする)、すなわち命をもたらすものである (ラテン語でアニムスAnimusと呼ばれる)。中国ではそれが「気」とよばれる。この生命力は体の機能を維持し、生命に欠かせないバランスを保っている。生命力が働かなくなったとき、私たちの命は絶えてしまう。

ホメオパシーの哲学では、生命力は元素的で分解できないものと考えられ、与えられた刺激に対して全体として反応する。刺激が十分に強かった場合、生命力には継続的な歪みが生じるが、その歪みをホメオパシーでは「病気」という。生命力は分解できないものなので、瞬間的にはひとつの歪みしか抱えることができない。このような歪みは生命力の感知能力、すなわち不健康な状態を読み取る能力を低下させ慢性病を起こしてしまう。そうなれば、生命力はある病気から自分で治る力を持っているにもかかわらず、その病気に気付かないため、結局病気が治らないことになりうる。私たちにとって生命力は欠くことのできない存在であるので、その力が不調になったときに、私たちは様々なレベルで様々な症状を感じるようになる。

ホメオパシーのレメディーは、直接その生命力に働きかける。生命力にとってホメオパシーのレメディーは病気を引き起こす刺激になり、そしてその刺激が十分に強いものなので、生命力はこの刺激を跳ね返すように動き出す。レメディーが引き起こす病状が治療しようとする病状と同じものである場合、生命力はその相似を認識し、レメディーの刺激と一緒にもとの病状を追い払う。実は、病状と類似性を持つレメディーを与えることでわれわれは生命力に鏡で自分の姿をのぞかせることになる。生命力は一定の時点において1つの病状の組み合わせしか抱えられないため、その病状を治すためには1種類だけのレメディー

が必要である。

患者は喘息、胃炎、頭痛、湿疹、そして鬱病といった複数の病気を抱えているように見えるが、そのような患者も1つのレメディーしか必要としない。なぜなら、それらの「病気」は全て、中心的な生命力の病的な状態の症状に過ぎないからである。

ラジャン・サンカラン氏は『ホメオパシーの精神』という著書の中で、以上に述べたことを次のような比喩を持って説明している。つまり、棒の周りに複数のぶどうのつるが伸びながら巻きついていくとしよう。我々の中にある棒を実際に見ることはできなくても、ぶどうのつるは棒がなければ落ちることをわかっている。中に棒があることがわかる。我々は1本のぶどうのつるを切り落とし、さらに次のつるも、その次のつるも切り落とすことができ、ついに全て切り落としと思うまで続けることもできる。が、つるを支える棒がそこにある限り、ぶどうのつるはいつまでも芽生え続けるであろう。

ここでの棒は生命力の中心的な攪乱を、そしてぶどうのつるはいわゆる私たちの「病気」をあらわしている。棒に巻きついたぶどうのつるの形（患者の症状の細かい個人的な特徴）を観察することで、棒自体の形（内面的な攪乱の全体的な特徴）を想定することができ、健康な人にそれと似たような攪乱を引き起こすレメディーを選択することができる。ホメオパシーの手法によって加工されたそのレメディーが患者に与えられ、患者の生命力を出動させる。生命力自体が自分自身の攪乱を取り除いたら、個別の「病気」は全て治ってしまう。

私は、科学的な思考を持った人々に対して、ホメオパシーの作用をアインシュタインの物理学にたとえて説明することが個人的に好きである。アインシュタインは光の速度に近い速度で移動するときの時間の流れの歪みを説明する理論を、このような速度での移動が実際に可能になる前に打ち出している。ホメオパシーは、光の速度に近い速度での移動のようなもので、しかもそれはすでに起きているのである。つまり、我々はその効果を観察はできても、その作用を説明することができない。アインシュタインのような人が今現れて、その作用を説明することが必要である。もちろん、もしこのような説明がつけば、我々の宇宙に対する理解は根本的に覆されるだろう。その結果、科学全体が大きく変わって、その新しい科学と現代科学の関係は、アインシュタインの物理学とニュートンの物理学との関係に類似したものになるだろう。

「何か信じがたいものがどこかで発見されるのを待っている」

カール・サガン

理論から実践へー魔法が効いている

ホメオパシーによる治療では時間がかかることが多い。大半のホメオパスは初診時に患者と1～2時間、時間をかけて会談を行う。まず、患者の体調を評価するために患者の病歴と最低限の身体的診断を行う。ホメオパスは患者をできる限りよく理解するために様々な情報を集める。診察の最初に患者に主な症状を詳述してもらい、それを書きとめる。そのとき、その症状は何によって悪化あるいは改善するのか、どの時間帯（具体的な時間まで）に一番悪化するのか、原因と思われるものや状況は何か、また、主な症状と同時に発生する症状があるのか、ということを知る。特に一見全く関連がないかのように思えるものが興味深い。次に患者の体質を調べる。すなわち、この患者は普段暑がる人なのか、寒がる人なのか、どんな時にどのように汗をかくのか、食事で特に好きなものなどを聞く。そして診察の大部分を患者の「心」を理解することに当てる。ほとんどの病気は、その人が精神的ストレスに耐え切れず、緊張が高まり、それが身体的な症状として発散されるものなので、ホメオパスは患者のこの側面を知ることが必要になる。患者の精神に影響するもの、ストレスの一番強い原因となるもの、そして患者のストレスへの対応の仕方など、それらへの深い理解がその患者の症状を緩和するものを見つけるためのカギを握っている。

症状に関する情報を集めたら、あるレメディーの本質が見えてきて、それをすぐに処方することができることもある。しかし、より頻繁なケースではレパートライズ、すなわちマテリア・メディカに記述されたレメディーを相互に参照するために、症状別にレメディーが収録された「レパートリー」と呼ばれる手引き書を引く必要が出てくる。マテリア・メディカというのはプルービングによって解明された、様々なレメディーの典型的な症状をレメディーごとに収録した本のことだと思いついてほしい。現在、複数の著者によって書かれたいくつかのマテリア・メディカが存在している。また、プルービングで現れた症状のほか、著者が経験した、そのレメディーによって治癒された症状もそれぞれのマテリア・メディカに付け加えられている。

ホメオパスは患者に見られる重要な症状を全てカバーするレメディーを割り出すためにレパートリーを使う。通常、すべての重要な症状を併せ持つようなレメディーは数少ない。それらのレメディーが見つかったら、ホメオパスはマテリア・メディカを再び開き、患者の本質に一番合うレメディーを選ぶ。この作業は大変時間がかかるので、最近ではホメオパスを助けるようなコンピューターソフトが開発されている。しかし、コンピューターを利用して、患者の症状のうちどれが重要なかを判断するのは熟練したホメオパスにしかできない。

レメディーが決まれば、1回のみ、もしくは数回繰り返すよう処方する。患者は、2日から2ヵ月の間隔を置いた後、再診に訪れるようになっている。その再診はとても重要であり、この2回目の診察によって、処方されたレメディーに対する患者の反応をホメオパスが観察し、評価することができる。患者は自分自身ではそういった観察や評価を行うことはできない。患者は、病状がわりと楽になったので、もう治ったと判断したり、あるいは逆に、体調が悪くなったのでレメディーが効いていないという判断をするかもしれない。しかし、どちらの判断も実は全くはずれていることがありうる。見かけ上は症状が改善していても、実は望ましい方向には進展していないかもしれないし、見かけ上は悪化していても、実は治療過程に起こりうるいわゆる好転反応であるかもしれない。治療の経過を客観的に判断するのは、ヒーリングによ

る治癒の方向性の法則（次章参照）を念頭に入れているホメオパスにしかできない。

私の場合、慢性疾患をもった患者の再診は、通常1ヵ月後ぐらいに行っている。再診時に初診で処方したレメディーが適合していたかどうかを判断する。合っていた場合はそのレメディーの服用を続けてもらい、また2、3ヵ月後に再診を行う。レメディーが合っていない場合、再び症状を聞き取り、新しいレメディーを処方して1ヵ月後に再度診察する。

いくつかのケースを紹介しよう。私の息子が3歳半になった頃、私がホメオパシーの勉強を進めていた時のことだ。私たち家族は、滞在先を3大陸にわたって6カ所、次々と変えていた。息子が3歳になった時、私たちはインドのボンベイに滞在していた。このような連続的な移動は息子に悪い影響を与え始めていた。息子は怖がりになり、母親に必死にしがみつこうようになっていた。妻が部屋を出るたびに、息子は声を限りに泣き叫んだ。

そこで、私は息子のケースを取り、ストラモニューム（*Stramonium*）1Mを処方した（1Mとは現物質を 10^{2000} 倍に薄めたものだ。すなわち、物質は全く残っていないに等しい）。ストラモニュームというのは毒性の植物で、健康な人が食べると、圧倒的な恐怖感に襲われ、まるで野獣が潜んでいる森に一人で置き去りにされた子供のように脅えてしまう。私が息子の治療を試みた時点で、息子がこのような精神状態にあったことになる。レメディーは目覚しい効果をもたらし、レメディーを1粒服用した日から2日以内に、息子は妻が部屋を出ることを耐えられるようになった。その後彼は家中を探検したり、2階に登ったり、外に出たりすることもし始め、やがて知らない人に話しかけたりするようになった。

もう1つとても興味をそそられるケースを紹介しよう。ボンベイに住むある女性のケースだ。その女性はあらゆる痛みで襲われて線維筋痛（慢性筋肉痛）と診断されていた。正式に彼女のケースを聞き取る前から、私はこの女性が自宅での様子を見ることができた。ある出来事が私を驚かせた。ある日彼女の冷蔵庫が壊れてしまい、彼女は私にその冷蔵庫をどこで修理できるかを尋ねてきたのである。私は外国人であり、彼女は現地の人だったので、これはちょっと異常だと私は思った。つまり、彼女は自分でその故障に対応することができないと感じていたようだった。その後彼女のケースを取った時、彼女は自分が恥ずかしがり屋で、自分のことが愚かに思われ、人に笑われるのではないかと心配で、パーティーに出ることを嫌っていると語ってくれた。彼女には*Baryta Carbonica*（バライタ・カーボニカ）1Mを処方した。このレメディーは胃腸のレントゲン検査を受ける時に飲む炭酸バリウムだ。この物質をホメオパシーのレメディーに使われる希釈で薄めて飲むと、自分が愚かで無能なものと思い込み、依存症に陥ってしまう。このレメディーを必要とする典型的な患者は、とても恥ずかしがり屋で、他人に笑われることを恐れている人である。また、このレメディーを必要とする子供は診察室に入ったら家具の後ろに隠れたりする。このレメディーを服用して2週間以内に、この患者の痛みはすべて治っていて、あらゆる面で大きな進展が見られた。

この2つのケースでは共に、患者たちは自分が置かれている状況から見ると、不適切なことを感じていた。私の息子は、何も怖がる必要はなかったのに怖がっていて、女性の患者の場合は、本当はかなり賢い人だったのにも関わらず、自分が愚かだと思い込んでいた。この点こそ、私たちホメオパスが患者のケースを分析するときに見出そうとする点である。すなわち、状況から見て意味をなしていない、あるいはなんとなくふさわしくない反応や態度、出来事に対する過剰な、あるいは過少な反応や奇妙なことなどである。最初の面接が多く数の患者には不思議なものに思えるのはそのためである。ホメオパスは、患者のもと

もとの主症状にそれほど興味を持っていないかのように思えるところがあるが、それは全く正反対で、本当は大変興味を持っているのだが、最適なレメディーは、一見、主病状とは関係のない症状によって決定することがあるのだ。時には、上に述べたケースのように、精神的、感情的な症状からケースのカギが得られる。時にはそのカギは珍しい身体的な症状が握っていることもある。胃腸の痛みと消化不良を訴えるある患者に最適なレメディーを、その人が明るい日差しに当たったら必ずくしゃみの発作を起こす傾向によって見つけた経験がある。つまり、患者のケースを分析する時には、一体どの症状が一番重要になるかを前もって知ることは全くできないということだ。

しばしば、患者の夢を通じて決定的な情報が得られることもある。私たちが寝ている時、私たちの感情は意識などの影響を受けないため、多くの場合、感情は夢の中で一番はっきりと現われる。例えば、私は喘息を持ったある女の子を治療したことがあるが、彼女のケースの鍵となるような症状がなかなか見つからなかった。そこで、夢について聞いてみた。するとかなり悲惨な状態が明らかになった。女の子は夢の中で、いつも1人で、両親も友達も、他の人が誰も出てこなかった。彼女は夢の中で1人ぼっちだった。そして夢の話をする時にも、彼女はかなり寂しそうにしていた。このように、起きている時には意識の奥に押し込められているが、夢の中でははっきりと現われる、自分が「孤児」であるような感覚は、**Magnesia Carbonica**（炭酸マグネシウム）というレメディーの特徴的な症状である。このレメディーの1Mのポテンシーのものを1回服用した後、この女の子は喘息から解放され、もっと元気のいい子になった。

ホメオパシーに関する知識は、時に、レメディーを必要としない患者のケースでも医師の助けとなる。医師は皆、不眠症に悩まされる患者をかなり多く診てきている。このような患者の病歴をもっと詳しく探ってみると、多くの患者の場合、1日にコーヒーポット何本にも相当する量のコーヒーを飲んでいることがわかってくる。ホメオパシーの観点からいえば、この患者たちはコーヒーをプルービングしている（プルービングに関する章参照）ので、すぐにコーヒーの量を減らすべきだろう。このようなことは医師なら誰でもいえることかもしれない。しかし時には、患者が何らかの物質をプルービングしていることがはっきりと分からないケースもある（プルービングとは一種の副作用、あるいは中毒と呼んでもいいだろう）。私が経験したもっと面白いケースを紹介しよう。95歳の医師が、大変な不安に陥ってしまうような夢に悩まされて私を訪ねて来た。夢の中では、彼は見知らぬ場所において、自分の家につながる道を見つけることができなような場面が出てきたりした。彼のケースの場合、これが一番奇妙な症状だった。私はこの症状をレパートリーで引いてみたところ、その症状のところに出来ていたレメディーの中に**Glonoinum**（ニトログリセリン）があり、それを見て私はこの患者が今服用している薬のリストに目を通した。すると、毎日服用する薬の中に**Nitrobid**というニトログリセリンと似た作用を持っている長期作用性のものを見つけた。その**Nitrobid**の代わりに代替薬を処方してみたところ、不安な夢の問題は（あっさり？）解決された。

「真実は人間によって作られた話より奇妙だが、なぜなら、生命は何がありそうだとか、ありそうでないなどと全く気にしないからだ」

レオ・ロステン

支払い一世の中にはただのものはない

病気とは、ストレスに適切に対処できなくなるような生命力の攪乱である。緊張が高まった時に、生命力はその緊張を効率的に発散させることができず、その緊張が病気の症状を生み出す。治療の目的は生命力を発動させ、生命力が問題を認識して緊張を取り除くように動くようにすることである。緊張が発生した過程が長かった可能性があるため、この緊張が取れるときに他の症状が途中で現われることがあり、多くの場合、以前に経験した症状が再び現われる。レメディーに対する正常な反応を見分けるための基準を述べているヘーリングの「治癒の法則」によれば、症状は次のような順番で現われたり消えたりする。

- ・ 重要性のより高い臓器や位置から重要性のより低い臓器、位置へ
- ・ 中心から外側へ
- ・ 上から下へ

人生を遡って、順番を逆行して

・

治癒が起こる時、昔の症状が現われてくるのだ。まとめて言えば、攪乱された生命力は体の不適切なところに内的緊張を分配する。レメディーが秩序を取り戻すように働くと、緊張はより重要な臓器から比較的重要性の低い臓器へ移り、やがて体から完全に抜けてしまう。

もう1つの重要な概念は「症状の鎮圧」である。ホメオパシーでは、病気の中心に向けられていない治療法によってある症状が抑えられると、より重要な臓器が疾病に冒される可能性があると考えている。その理由は、異常な緊張の発散ルートがさえぎられた場合、おそらく自然治癒力がその緊張をまた違うところで発散させようとするからであろう。

1つの例としては、皮膚炎に悩まされる子供によく処方されるステロイド剤である。ステロイド剤は皮膚炎の治療に長い間使われており、多くの場合治療が成功して、関係者みんなが安心する。ところが数年経つと、この子供は喘息にかかってしまう。皮膚科の医師に言われたことだが、子供はよく皮膚炎から喘息へ「成長していく」という。このような子供は「アトピー」の傾向を持っているといわれ、医師はステロイドの使用と喘息の発症の間に何の関連も見出すことがない。

しかし、ホメオパスはこれを違う視点から見る。皮膚炎は自然治癒力の攪乱の結果であり、皮膚炎がステロイド剤によって抑えられてしまうと、より重要な臓器が脅かされることがホメオパスには予測できる。すると実際に喘息が発生する。この時点でホメオパシーを使って子供を治療する場合、ホメオパスは喘息が治ったら皮膚炎が一時的に戻ることを考慮に入れる。症状は内側から外側へ（肺から皮膚へ）、より重要な臓器からそれほど重要でない臓器へ、そして発生順を逆行して移動していく。しかし、この時点で子供がホメオパシー治療を受けずに、喘息をアロパシーの薬で抑えたとしたら、数年後、その子供が20歳あるいは30歳になったときに、病気はうつ病あるいは偏頭痛などのより重篤なものへと発展していくだろう。このような段階になってホメオパシーの治療を受けたとしたら、この患者は皮膚炎がまた出る前

に、喘息が再発する過程を通り過ぎることをホメオパスは予測する。昔の症状が戻ってきた時にそれらを表面的な治療で押さえてはならない。自然治癒力が病気を外側に退治しようとする時に、その働きを妨げてはいけない。なぜなら治癒の進行が停止して、それまでに得られた状態の改善が消えてしまう可能性があるからだ。

私の経験の中から1つの例を挙げよう。ある日私のところにうつ病と不眠症を治療するために五十歳の男性患者が来た。レメディーを服用してから、彼はかなり良く眠れるようになった。そしてそれと同時に脚の股のあたりに湿疹が現れた。この患者は以前にこのような湿疹を経験しており、その時に使った塗り薬をまだ持っていたので、湿疹が出ると患者はすぐさまその塗り薬を塗ってしまった。湿疹は大変早く消えたが、それと同時に改善されていた睡眠も再び妨げられるようになってしまい、我々は治療の出発点に戻ってしまった。その時、私はその患者に治癒の法則を説明して、再びレメディーを服用させた。運良くレメディーがまた効いて、睡眠も湿疹も戻った。今度は、彼は湿疹を抑えずに痒みを数ヶ月間我慢することにした。その間患者の精神状態は著しく改善され、湿疹もやがて消えていった。このようなケースは決して珍しくない。ホメオパシーのレメディーに対するこのような反応は何度も目にしたことがある。私たちホメオパスが、患者の病歴を尋ねて、いままでに症状を薬で抑えたことがあるかどうかを注意深く見るのはこのためである。

昔の症状が戻るということは、回復に対する「代金」だと考えることができる。患者の以前の症状が戻ったとき、私は患者に1つの質問をする。つまり、「この状態はあなたが感じている症状の改善の代金として値するものなのか」、あるいは「あなたが最初に治そうとした症状を取り戻したいと思うか」という質問である。大多数の患者は治療によって得られた全体的な改善をとっても高く評価し、ちょっとした悪化は我慢することを希望する。アロパシーの薬を使って治療の効果を消し、元の状態に逆戻りさせることはできるが、私の患者のほとんどが、悪化が通り過ぎるまで待つことの方を選ぶ。

“健康に関する本は注意深く読もう。なぜなら、印刷ミスのおかげで死ぬこともありうるからだ。”

マーク・トゥウェイン

安全性—火遊びしてはいけない（火遊びは禁物）

ホメオパシーに関する一番大きい誤解といえば、ホメオパシーは自然療法であり、害をもたらすことは絶対にないという考えだ。ホメオパシーは、やさしく、副作用なく治癒させることが可能なのは事実だが、ほとんどの場合ホメオパシーによる治療は必要な訓練を受けた、落とし穴を避けることができる専門家の下で行わなければならない。この点はいくら主張しても無駄にならない。ホメオパシーは大変強力で効き目の深い治療法である。ホメオパシーのレメディーの効果は現在使われているアロパシーの薬のどれよりも根本的で持続性がある。ホメオパシー療法を使用すればするほど、その力をより敬い、その使い方により慎重になるばかりだ。

ホメオパシーのレメディーは家庭での使用に完璧に適しているとよく言われる。ホメオパシーのレメディーキットは手に入りやすいということもある。それに反論するつもりはないが、この療法はこれだけ強力なものなので、自分で使う前にはできるだけたくさん勉強したほうがいい。「推薦できる本」のリストがこの冊子の最後に挙げられている。不適切な方法で使用すると、場合によっては、ホメオパシーのレメディーは望ましくない効果を引き起こす可能性もある。そういうことは少ないが、ホメオパシーのレメディーを自分の判断で使おうとする人はこのような可能性を把握して、どのようにすればそれが避けられるかを知っておかなければならない。

ホメオパシーのレメディーは患者が持っている症状を悪化させることができることが知られている。普通はこのような悪化は比較的短く、軽いものである。しかしながら、場合によっては軽い悪化でも大変な重体につながることもある。高齢者や重病の慢性疾患患者のように自然治癒力が弱っている人の場合、このことを考慮に入れなければならない。

たとえば、冠動脈疾患を持つ患者は、心臓の筋肉に血液を送る動脈がコレステロールの塊でふさがっていたりする。この病気が進んだら、患者は軽い運動でも胸に痛みを感じるようになる。冠動脈はこのような閉塞の周りに痙攣を起こす傾向があり、痙攣が起きたら痛みがひどくなる。この状態が長時間続けば、心臓発作を引き起こすこともある。こういう患者の状態に合ったホメオパシーのレメディーでも、ある患者にとっては希釈度が高すぎた場合、レメディーによって閉塞の周りに痙攣状態が引き起こされるという症状の悪化がもたらされる可能性がある。ここで考えなければならない点は、レメディーの希釈度は患者の状態に合わせて個別に選ばなければならないものであり、ある患者にとって低すぎるものでも、違う患者の場合、高すぎることもあるということだ。適切な資格を持った専門家はどのケースにどのような希釈度が必要なのか判断することができる。しかし、自宅で自分の判断でこのような患者を治療しようとする人は、必ずしもこの違いを把握できていないかもしれないので、治療しようとする本人が覚悟ができてい以上の問題を起こしかねない。

ホメオパシーのレメディーがもたらす可能性のあるもうひとつの問題は、患者にプルービング症状が出る事態である。それが起こりうるのは、レメディーが必要以上に頻繁に服用されたり、必要以上に長く服用されたときである。そうするとレメディーの典型的な症状が（すでに説明されたプルービングのときと同じように）出始め、患者の状態がかなり悪くなることもありうる。ホメオパシーの専門家は回数を重ね

てレメディーを服用するように処方したりするが、そのときどのようなことに注意すべきなのかは専門家ならわかる。適切な訓練を受けたホメオパシーの専門家はすぐにプルービングが起きていることを見分けて、重大な問題が生じる前に手を打つために処方を調整するだろう。これはアロパシー薬の服用によって副作用が生じた場合、医師が治療の方針を調整しなければならない状態と同じである。家庭でホメオパシーを使う人は、自然療法なら絶対に安全であるという一般に普及している誤解によって安心しすぎて、必ずしもこのような問題の発生に気づかないかもしれない。

ホメオパシーの複数のレメディーが複合された複合レメディーはまた違う害をもたらす可能性がある。複合レメディーの服用は自然治癒力を混乱に落としいれるので、たまには短期的に効いているようでも、将来において重大な健康問題を起ししかねない。私のこの主張に同意しないホメオパスがいるかもしれないが、私の教育と経験からすれば、私のこのような発言が妥当であると信じている。私のアドバイスとしては、ホメオパシー専門家の間に共通した見解ができていない現在の段階に、薬局で手に入るような複合レメディーを服用するときに、仮に私の言っていることが正しいかもしれないということを念頭に入れて、それを一日二日以上服用しないようにした方がよいと思われる。私個人としてはこのような複合レメディーを絶対に処方したりしない。同じことは現在市販に出回っている「ホメオパシーウェイト・ロス」キットにも当てはまる。

最後に、家庭でホメオパシーをしようとするのであれば、ホメオパシーに関してできるだけたくさん学んで、特に最初は低めの希釈度の使用に留めるようにするのがいい。風邪やインフルエンザのような波紋の少ない急性状態しか治療しないようにする。全体的に丈夫な人だけを治療する。レメディーを頻繁に変えないようにする。そして、何よりも常に自分の限界を認め、疑問に思ったことがあれば専門家にかかるようにする。以上のことを守る限りにおいてであれば、文句はない。是非ホメオパシーを試してほしい。時に奇跡的な効果を発揮しよう。」